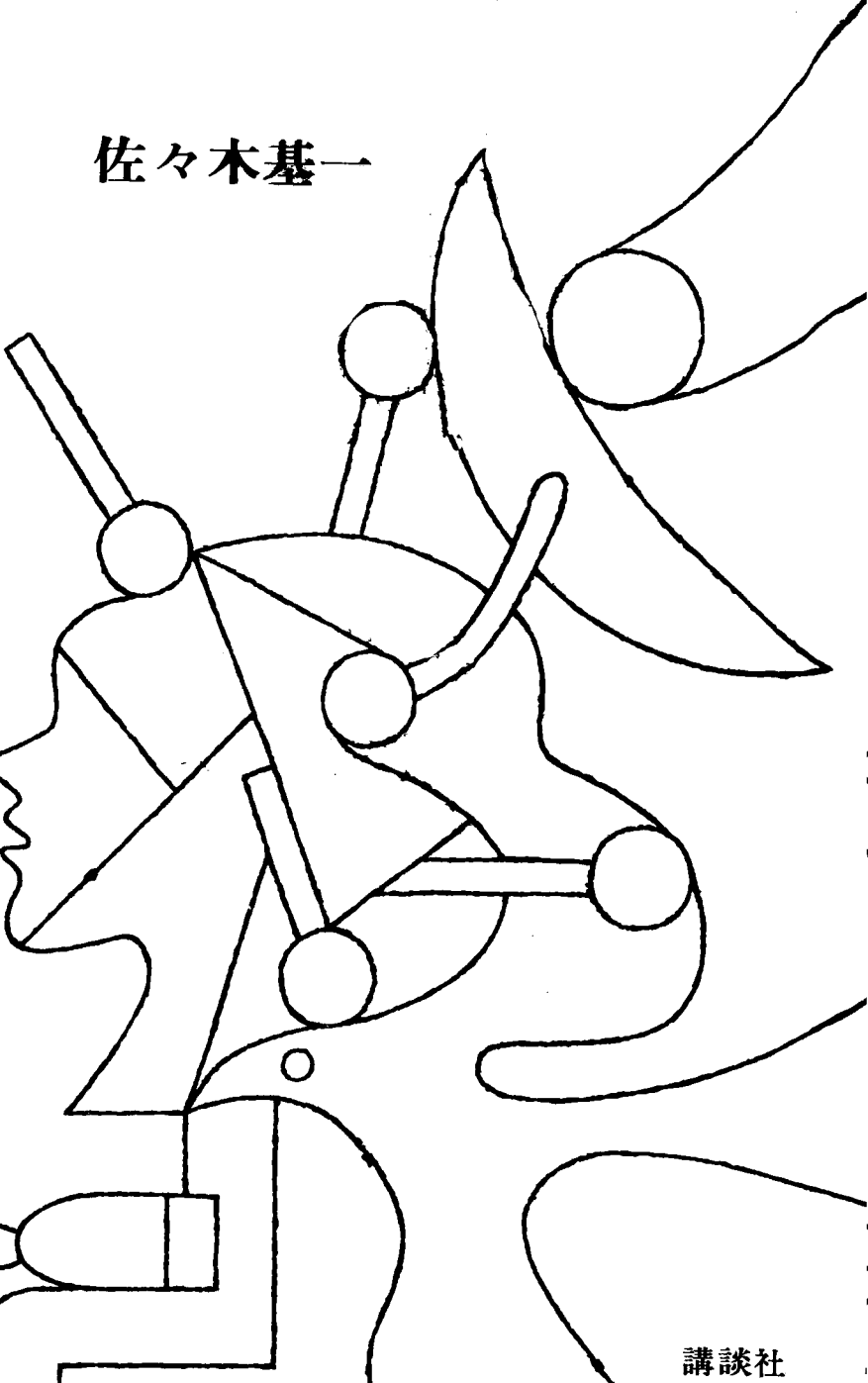
時の音

佐々木基一

佐々木基一



講談社

時の音

一九八二年七月八日　第一刷発行

著　者　佐々木基一
発行者　三木　章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　一三〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

© Kiichi Sasaki 1982, Printed in Japan

ISBN 4-06-200038-5（0）　（文1）

目次

尾道 5
鰯の町 37
擂鉢の底の町 65
神戸 95
市場のある町 125
M鉱業所 157
砂埃りの道 195

装幀　宮城輝夫

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

時の音

尾道

その家を探すのは造作ないことと思っていたのに、行ってみると、意外に手間どった。それというのも、そのあたりの街の様子が、どうもむかしと変っていて、容易に見当がつかなかったからである。道路が広くなっている。あるいは新しくつけ替えられたかと思えるほどである。たしかこの辺だと思ってあちこち見廻したが、そこら辺には石材屋や材木屋の倉庫と店舗を兼ねた殺風景な建物が並んでいるだけで、その家の姿は、どこにも見当らない。

その家というのは、わたしの中学校時代の親友Kの親父の家である。わたしがKと親しくなりはじめた頃にはすでに、尾道でいちばん大きな本屋を営んでいたKの父は、どういう理由でか店を売りはらい、別荘風の小粋な家を海辺に建てて楽隠居の生活に入っていた。Kの父はほかにも尾道市内に土地や家作を持っていて、生活にはかなり余裕があるようだった。むかしから風流を

好む商人が多かったという尾道の伝統をついで、Kの父もまた商人としてはかなりの風流人士で、戦前のいわゆる芸術写真などに凝っていた。背の高い、面長の、いかにも商人といった感じの腰の低い人であったが、どこか神経質で小心なところがあるようにも見受けられた。早く細君を亡くしたが、一人息子のKのために、独身を守っていた。家事はKの祖母がみていた。

Kもわたしも、広島の中学の寄宿舎に入っていたから、休暇のたびに一緒の汽車で帰り、休暇が明けると、尾道から三つほど西の郷里の駅でわたしは尾道からくる同級生のKやOと合流して広島へ行った。Kとは中学を卒業した後もずっと親交を続けた。ともにサッカーをしていた仲間だったからかもしれない。わたしは西の方の高等学校へ、Kは東京の慶応義塾の予科に入ったけれども、夏休みになると、交互に互いの家に泊りに行くのが、例年のならわしになっていた。一夏のうちにそういう滞在が一週間くらいずつ続くこともあった。またしばしば一緒に旅行もした。いまから思えば、じつにのんびりした時代であったようにみえるかもしれないが、精神的にはそれほどのんびりしていられた時代ではなかった。Kの家には、Kが兄と呼んでいる、さして年のちがわぬ叔父が、つまりKの父の末弟が、左翼運動のため京都の大学を退校になって蟄居していた。入れちがいにわたしたちと同じ中学を卒業したKの叔父は、開校以来の秀才と云われていたが、どういうものか試験運が悪くて、高等学校の入試を二度失敗した。Kの父と同じように、神経質で小心な性格の持主だったのかもしれない。三年目にやっと京都の三高に入ったが、やがて

左翼運動のかどで退校処分をくった。それで已むなく京都大学の選科に入ったけれども、そこもまた追い出されたのであった。

Kの父は危険思想の持主である末弟と、息子のKが接触することを極度に警戒していた。そこでKの友人として、ますますわたしを頼る気持になるらしかった。皮肉なことに、そのわたしも高等学校二年生のとき、ちょっと運動にかかわりをもって停学処分をくったことを、Kの父は知らなかった。Kがうまくとりつくろっていたからである。わたしが東京の大学に入り、家を借りて母と二人で住むことにきまると、Kの父から、ぜひともKを同居させてほしいと云ってたのまれた。見ず知らずの下宿屋に一人息子を置いておくのが、不安でならなかったのだろう。入学試験を終えると、わたしはしばらく千葉の姉の家でぶらぶらしていて、桜の咲く頃一旦帰郷した。夕方、尾道で急行列車を降りると、KとKの父が駅に迎えにきていた。そして、入学祝いだといって、その場から料亭へ連れて行かれた。千光寺の桜が照明の灯に映えて、ひどく華やいでみえた。家に蟄居している末弟には、煙草銭をその都度に渡すほかには、一文の小遣もやらないという話を以前にきいたことのある、そのKの父が、まだ学生のわたしを身分不相応な料亭へ連れて行って饗応してくれるのを、何となくこそばゆく感じながら、これも息子可愛いさのあまりだろうと思って、黙ってついて行った。

途中でそっとKに叔父の消息をたずねると、いまは家を出て、三原の次兄の家へ行っていると

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

いうことだった。Kの叔父が着流しでぶらりとその家を出て、行方不明になったという話をきいたのは、東京に住んで間もなくの頃だった。

Kとは東京で二年半ほど一緒に住んだ。休暇になると、これまで通り、互いの家へ交互に泊りに行った。卒業を翌年にひかえた年の夏、Kは東京西郊の省線電車に飛びこんで自殺した。その前の年に、行方不明だったKの叔父が、白骨死体になってみつかっていた。三原からさらに西の方の、深い山奥で首を吊ったのだった。通りがかりの樵がみつけ、下駄の裏に墨で書いた苗字が消えずに残っていたので、身もとがわかったのである。

最愛の一人息子に自殺されたKの父の歎きようは大へんなものだった。わたしは何かの供養になればと思い、その後も、尾道を訪れると、ときどきKの父を見舞った。しかし、やがて戦争がはじまり、敗戦と戦後の混乱が続いて、わたしが尾道を訪れる機会は久しく途絶えていた。戦後もずいぶん経ってから、家内をはじめて尾道に連れて行ったとき、わたしは古戦場の跡を家内に見せるような気持で、Kの家の方へ歩いて行った。すると、玄関脇の応接間だった洋間の壁がとりはらわれて、そこは通りに面した煙草店に変っていた。そして小さな男の子を膝に抱いたKの父が、年老いた好々爺といった顔つきで店に坐っていた。Kの父は、Kの死ぬ前年、祖母が亡くなったため、已むなく後妻をもらっていた。そしてKの自殺する直前に、その後妻に子供が産まれたのである。Kの父が抱いているのはたぶんそのとき産まれた男の子に出来た孫なのだろうと

想像しながら、わたしは立ったまま、Kの父と簡単な挨拶を交わして別れた。それから数年後、またその家の前を通りかかると、すでにKの父の姿はなくて、表札の名も変っていた。

それでも、その後尾道を訪れるたびに、わたしは必ずその家の前へ行ってみた。どういうわけか、その家がむかしのままにまだそこにあるかどうかを確かめてみないと、気が済まない。そして、まだその家が確かにあることを知ると、心の中で安堵するのだった。

こんどもまた同じことだった。尾道ははじめてだという同行の若いN君をつれて、午前中、浄土寺や西郷寺や西国寺など、お寺の多いこの市の中でも、とくに由緒深い寺を訪ねたのち、わたしは、またしても古戦場の跡へ案内するかのように、N君を促して海岸通りにあるその家の方へと足を向けたのである。ところが、来てみると、どこにもその家が見当らないのだ。

「どうも、おかしいぞ」

不意をつかれた感じで、内心ちょっとあわてながら、わたしはそこの通りを往きつ戻りつした。東側には、たしかにむかしながらの料亭がある。それはたぶん尾道でいちばん大きな料亭で、玄関前の小庭に植込みの松が生い茂っている。Kの父がここでわたしの入学祝いをしてくれたとき、左褄をとった芸者が、さらさらと衣ずれの音を立てながら部屋に入ってきたことをわたしは思い出した。軍都の広島にくらべて、尾道の芸者は格式が高いのだという話もきいたように思う。しかし、昨夜宿できいたところによると、現在尾道市には三人の芸者しかいないそうだ。

通りを西へ歩いて行くと、海に通ずる狭い露地をへだてて、これまたむかしから名の通った料亭がある。艶のいい、重厚な屋根瓦と焼板塀がむかしの風情をそのまま保っている。しかし、道路が拡張され、それにともなって家の前に駐車場がしつらえられたらしく、あたりが何となく乾いた殺風景な光景に変っている。そして、駐車場の脇に横腹をむき出したような恰好で、隣りの家の小門が通りにむかって突出している。間口は狭いが二階家で奥行きはかなり深く、Kの家と造りがそっくりである。あ、この家が尾道にくるといつも泊ることにしていた割烹旅館のSかな、と思った。京都風の狭い格子戸のはまった小門の脇の郵便箱に、墨で書いた小さな字がかすれているので、近よって眺めるとやはりSだった。どうやら、通りの様相が変っているので、すぐにはそれと気がつかなかったらしい。こんどもこの家へ泊りたいと思って、尾道にいる年上の知人のMさんに電話で予約をたのむと、しばらく前から宿はよしているということだった。山陽新幹線が隣りの三原市に停ることになったとたんに、尾道に泊る客が減ったということである。

わたしはよっぽど、Sの小門を開けて中に入って、Kの家はどうなったか、Sのおかみにたずねてみようかと思ったが、たずねてみたところで別にどうということもない、と考え直して、その家の前を立ち去った。Sのおかみは、この家へ移る前、一時Kの家を借りて料亭を営んでいたことがあるので、Kの家の消息にはよく通じていた。四年前泊ったときにも、Kの父と後妻はすでに死没してしまったこと、後妻の産んだ男の子が、ひどい極道者で、バクチに手を出し、財産

をなくしてすってんてんになってしまったこと、尾道にあったK家の土地や家作ものこらず手離してしまったので、尾道には居られなくなり、どこかへ行ってしまったことなどをきいた。それから四年経ったいまでは、Kの家そのものもついに消え去ってしまっている。

わたしは、Kの家の衰亡と没落の歴史にずっと立ちあってきて、ついにその最後を見とどけたような気持がした。一本の糸が、ブツンと音を立てて切れたような感じだった。

「やっぱり、ないな」

そう呟きながら、わたしはまだ未練がましくその通りを立ち去りかねていた。

「尾道は商人の街だから、むかしから、こんな料亭が発達しているんだ」

わたしは同行のN君にむかって云った。

「お座敷で、ゆっくりと、飲んだり食ったりするのが、ここの風習なんだ」

そのようなゆったりした風習を守ることなど、現代ではおよそ不可能にちがいないということをわたしは知っていた。いくらこの街が空襲を免れてむかしの面影をそのまま残している、全国でも珍しい都市の一つだといっても、世知辛いいまの世に、そんなゆとりを保つことなどとうていできることではないだろう。割烹旅館のSが廃業したように、やがてはこの二軒の大きな料亭も、廃業か転業を余儀なくされるのではあるまいか。それともそれは、福山市にある日本鋼管のような大企業に依存する料理屋になって、命を長らえるほかないのではなかろうか。しかし、そ

れでも、空しいこととは知りながら、わたしは若いN君に、この街のそんなむかしの風習や雰囲気について語りたい欲求を抑えかねた。
「いまから思うと夢みたいな話だがね」
とわたしはN君を顧みて云った。
「学生の頃、紺絣の着物きて、この街で芸者をあげたことがある」
ひょっとしてN君は、それを年寄りのノスタルジアと誤解するかもしれないという思いがちらと頭をかすめたが、わたしは敢て云った。むかしを懐しがる気持などわたしにはさらさらなかった。ただ、それも一つの人生体験として記憶にのこっているだけだった。
「Kが自殺した後の、冬休みだった。高等学校で知り合って、大学に入ってからもずっと東京で親しくしていた友達と二人でだ」
そう云いながら、わたしは狭い露地を料亭の壁に沿って海の方へ歩いて行った。二月はじめのことで、海風が冷たかった。このところ西日本はずっと異常寒波に見舞われているらしく、山を背にして海に臨んでいるので、普段は暖かいはずの尾道でも、肌を突きさすような寒風が吹いていた。昨日の晩には、小雪がちらついたりした。こんなに寒い冬に尾道にやってくるのは、おそらくあのとき以来はじめてだ、とわたしは思いながら、云った。
「むろん、こんな一流の料亭ではないがね」

露地の先は海だった。傾斜した石垣が、そこから満潮でもり上がった海水の中へ没していた。そこは舟の舫い場にちがいなかった。海辺に出ると、風が一そう冷たかった。そのせいか、川のような狭い水道を往き交う船の姿も少ない。対岸の向島ドックに、赤と白のツートンカラーのかなり大きなフェリイボートが舳の口を開けたまま繋留されている。その艫にくっつくようにしていま一隻、小さなフェリイがつながれている。しかし、ドック特有の鋼鉄をたたく音はまったくきこえてこなくて、ひどく静かだ。

ふとわたしは、むかしこの水道には朝早くから夜遅くまで、蒸気船のボンボン、ボンボンという音がひっきりなしに響いていたことを思い出した。海に面したKの家に寝ていると、朝早く枕もとを叩くようなその音で眼がさめた。夜はまた、黒い闇の中に吸いこまれて行くかのようなその音をききながら眠りについた。友人のWと一緒に芸者をあげて遊んだ市中の料亭の部屋の中にも、その蒸気船の音がかすかにきこえていたかもしれない。

Wはわたしよりも年上の友人で、早くから両親に死に別れ、尾道の古い漆器店へ嫁いでいる姉を、年が親子ほどもちがっていることもあって、母親代りにして頼っていた。東京では工業大学に学んでいて、航空機の設計技師になることを目標にしていた。

「この友人のWも、高等学校時代に停学をくっていた」

わたしはむかしもいまも若い学生たちのやることは、さして変りがないような気がして、Nに

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb